

オペラ座の地下五階に たとえば本当にセーヌ河に 通じる運河などがあっても実は不思議でも何でもない 『オペラ座の怪人』と“四季”の「戦争と平和」

光 藤 俊 夫

劇団四季の創設者の一人だった水島弘が72歳でなくなった。05年の夏の初めだった。93年の『オペラ座の怪人』を最後に彼のあの朗々とした美声が聴けなくなって久しくさびしい“四季”の舞台だったが、とうとうあのバス・バリトンと共に、誰にもひけを取らない堂々とした威風も観られなくなってしまったのが悔しい。劇団“四季”が誕生したのは、私が丁度京都の美術学校を卒えて、建築の設計を仕事として上京した頃で、それまでの学生時代から好きだった演劇の世界で、また新しい劇団の出来たことに深い興味を抱かせられたものだった。しかもそれまでの新劇での赤毛物（西欧のお芝居）の定番だった、たとえば「桜の園」や「ヴェニス商人」といったものとは違ったフランスの作家、ジャン・アヌイの「アンチゴヌ」やジャン・ジロドゥーの「オンディーヌ」などの新鮮な響きの舞台を次々と披露してくれたのだった。これも後で知ったことだったが、「東京大学仏文科在学中に“四季”創立に参加したが、もしもそのまま東大に残れば、いずれ教授となり仏文界に一時代を築いたであろう知性の持ち主であった」（懇話会での経歴紹介文より）水島弘が居てのことだったのだろう。そういえば、“四季”当初から魅力的な演技での活躍振りで沸かせていた女優の藤野節子とか影万里絵とか（いずれも故人）も懐かしい。やがて水島弘とは共通の友人の紹介で“お知り合い”とはなったが、私の家と彼の家が近かったせいもあって、何度か行き来し、彼も好きだった「お酒」をくみあうことも何度かあった。加えて“四季”が「春休み」とか「夏休み」とかに決まって公演を企てていた「子供ミュージカル」に、私の子供たちも大ファンとなり、当然のことながら私ら夫婦もその都度、当時“四季”のホームグラウンドと言えた日比谷の日生劇場に子供たち

のお供を仰せつかり、よく通ったものだった。その中で水島弘が歌った「王様の耳はロバの耳」が忘れられない。

ところで、水島弘の最後の舞台となった『オペラ座の怪人』も、フランスの作家ガストン・ルルーの原作「Le Fantôme de l'Opéra（オペラ座の怪人/1911）」が基になってのお芝居だが、今日でも“四季”のレパートリーとしてあり、また映画としては1925年に米作品としてユニバーサルで制作されて（ルパート・ジュリアン監督）以来、何度か映画化されている快作だ。私は1925年のロン・チャーニー（この俳優さんについては前に「ノートルダムの○○○男」のところで触れた）主演のものを、当然のことながらリアルタイムでは観ていないが、後にDVDで観た。あまりにも有名な物語なので、いまさらの紹介も不必要なのだが、一応粗筋を述べておくと、中世の拷問室や土牢の上に建っているせいとか、オペラ座の地下の暗渠に幽霊が潜んでいるという噂がある。“オペラ座”だが、普通にそう呼ばれる劇場はヨーロッパ中の都市ならどこにでもあって、それが無いのは世界で日本くらいなものだ。宝塚歌劇場と言うのはあっても、それを“宝塚オペラ座”とは言わず、渋谷の第二国立劇場も本来は日本の“オペラ座”と呼ぶべきものなのだが、そんな呼称に慣れていないせいからか、あるいは催し物が必ずしもオペラと限られていないからか、“オペラ座”と言って日本のそれを思い出すことはほとんどない。もっとも『オペラ座の怪人』の場合もそうだが、物語やお芝居や映画で単に“オペラ座”と言えば、これはもうミラノのそれやヴェニス、またパレルモの「ヨーロッパ最大」と言われているそれらのどれを指すのでもなく、フランスはパリに1861年、シャルル・ガルニエ（1825-1898）の設計で建ち上がった、あの“オペラ座”に他ならないのだ

が——。ガルニエと言う建築家は寡作であり、私も他に見たものと言えば、モナコのモンテカルロのカジノ館(1878)くらいしか知らないが、1889年にギュスターブ・エッフェル(1832-1923)の設計によって建てられ今やパリのシンボルとなっている、かのエッフェル塔を「パリの空の輪郭を永久に破壊してしまう、忌まわしい鉄のおぼけ」と呼んだ建築家としての方がよく知られているかもしれない。さてその“オペラ座”内部を見学したことがあった。昔のことなので何の用で入館したのだから、単に見学のためだけでいつでも入れるものなのかどうか、もはや忘れてしまったが、初めて見たそのインテリアに極めて感激的な驚きに見舞われたものだった。ことにも入って直ぐの中央の大階段のあるホワイエの華やかさには映画や写真で見ただけのうろ覚えのものとは違うオーラが渦巻いていて、いかにもこの中に怪人の一人や二人が潜んでいそうなドラマティックな装置と感じさせるものだった。そしてそれにも勝る豪華さに飾られた客席の上階五階ボックスシートにいつも席をとり、気に入ったプリマドンナ(クリスティーヌ・ダーエ=メアリー・フィルビン)が歌う舞台に見入っているのがここに昔から住む“幽霊”と言われている、所謂『怪人』なのだ。実はこの『怪人』、先に言うとおくと、若い頃に独学で音楽家となるのだが、悪魔術の教祖ともなり、極めて狂的な犯罪を繰り返して、しかるべき島に流刑となっていたのだが、ここを脱走し、今や秘密警察によって捜査追跡中の本名をエリックという「極悪非道の罪悪人」なのだ。それで『怪人』捕縛に一生を懸けている刑事(秘密警察官ルドゥー=A.E.ケリュエ)がいたりするのだが、このいささか異常な面構えの彼が画面に突如として現れた時は、「これが怪人かしら？」と思わせられたものだ。それはともかく、『怪人』が大女優と言えども気に入らない歌手(カーロッタ=メアリー・ファビアン)が出演している舞台では、突然照明がおかしくなったり、いきなり客席のシャンデリアが、建物ごと揺らせながら、大音響と共に落下してきて、大勢の怪我人が出たりして、といったことが始終出来るのだ。そしてその都度、大女優歌手の代役としてクリスティーヌが起用されるという仕組みを演出してみせるのだ。加えて言えば、そこで、昔取った杵柄とばかりに大女優歌手に勝る歌唱法をひそかにクリスティーヌに伝授したりするのだが、あくまで、これはもう『怪人』の勝手な片想い、クリスティーヌにはすでにれっきとしたラウール子爵(ノーマ

ン・ケラー)と言う婚約者がいて、愛し愛されの仲というなら、『怪人』の愛がどうであろうと受け入れられるはずがない。いわんや、ある時、『怪人』に楽屋からさらわれ、エリックが住むオペラ座の地下五階の、セーヌ河に通じる運河のその奥の、幾つもの仕掛けを潜っての彼のベッド代わりの棺桶が横たわっている隠れ家に連れて来られたクリスティーヌは、そこで偶然にも『怪人』の仮面を剥がしてみた、その世にも恐ろしい醜いエリックの面妖を知ってはなおさらのことだったのだ。

そしていよいよクライマックスを迎える。冒頭で華やかに映し出されていた、あの大階段のある(そう、映画『タイタニック』(ジェームズ・キャメロン監督/1997)にも同じようなセッティングがあった——と言うより、この浮沈客船のホワイエがそっくりそのままオペラ座のそれと同じということによる)オペラ座のホワイエで、年に一度パリ市民たちによって開かれるとされている仮面舞踏会を背景としてだ。(事実そんなことがあるのかどうか私は知らない——ガストン・ルルーのつくり話か?)『怪人』がここで赤い毛皮のマントで現れるところで華やかさを増そうとしてか、この時代にしては珍しくパートカラーになっているのだが、場所が場所だけに(実際に本物でのロケが可能だったのかどうか不明だが)極めて効果的なシーンにはなっていたと思う。もっとも、仮面をみんなが着けているし、そこへもともと“仮面”を着けた『怪人』が「お前らの浮かれ踊っているその足下には、拷問で苦しめられ血まみれとなって死んでいった人たちが眠っている墓場があるのだ。だから俺は赤い衣装で、お前らの楽しみを邪魔してやるのだ」とばかりに躍り現れてくるのだから、主役に色が施されていれば、その方が判りいいというわけだ。もちろんその中にクリスティーヌもいて、彼女を再びさらいに現れた『怪人』から婚約者を護ろうとしてラウール子爵もクリスティーヌと一緒に逃げるための馬車をオペラ座の西門あたりに用意しておいた上で、ルドゥー刑事らと共に舞踏会に紛れこんでいる。さてそこで、舞台係のジョセフが死体となって梁に吊され、ラウール子爵と一緒に『怪人』を捕まえ、クリスティーヌを助け出そうとやってきていた子爵の兄シャーニー伯爵も『怪人』の奸計によって運河で溺死させられてしまう。そこで手を取りあって子爵とクリスティーヌが一先ずはと逃げ延びるところが、なんとオペラ座の屋根の上ということになっているのだが、これまた実際の「屋根」の上でのロケなのかど

うかはともかく、オペラ座の屋根の上は幾つも彫像が施してあるということがよく分かるのだ。そして二人を追っ掛けて来た『怪人』の「隠れ蓑」として役立たされているのが、その「彫像」ということになっている。そして結局はまんまとクリスティーンをさらっての『怪人』は、ラウル子爵が用意したオペラ座の西門の馬車を奪うと、自分の愛と鼻頂を受け入れて貰えないその腹いせをいかに果たそうかと考えあぐねながらも、限りなく恐怖に戦くクリスティーンを飽くまでも己のものにしようと抱き抱え、馬に鞭打ちセーヌ河畔をひた走るのだ。そして結末は名画と言われているわりには、意外とあっけなく終わる。『怪人』の実に忌まわしい行状や奇怪な行動に怒り狂った仮面舞踏会での人々が「怒りの群衆」となって『怪人』を追いかけ、ついにはこん棒でめった撃ちにされたエリックは、哀れセーヌ河に投げ込まれて果てるのだ。もちろんラウル子爵とクリスティーンを怪我無く救助しての上でだが――。

ところで、この物語、いつかの項でふれた『ノートルダム・ド・パリ』の鐘突き男のあのカジモドとジプシー娘のエスメラルダの様子に似てはいはしまいか。もっとも、エスメラルダはカジモドの何時もの親切心に感謝もし、愛しているとか惚れているとかいうのではなくとも、心の友としての好感を抱いているといったところまで、まあ、『怪人』とクリスティーンの場合とはてんで違うとも言えるのだが――。またのちに、これまた「名画」として馳せることになる『キング・コング』（メリアン・C・クーバー／アーネストン・B・ジェードサック監督／1933）における、アフリカから見せ物として連れて来られた大猿と人間のお嬢さんとのニューヨークにおける、決して叶うべきもない恋、大猿「キング・コング」のあどけない恋心と「お嬢さん」のしおらしくも優しい情操、もちろんここでも『オペラ座の怪人』のような、どろどろした恐怖と陰惨な背景はないのだけれど――。

1984年のことだったと思う。デザイン会議でニューヨークに滞在していた時、空いた時間が出来、是非ブロードウェイで何かミュージカルを観たいと思った。内容はあらかじめ知っているものでなければならぬ。言葉が不自由だと満足な楽しみ方ができないではないか。ふと、これも仕事でテヘランに滞在して居た時、休みの日に映画を見ようと思ったが、あちらではアメリカ映画でもフランス物でもすべてペルシャ語に吹き変えてある。ペルシャ語が分から

なければお手あげだ。そこで私は上映中の映画を新聞で調べ、『オーメン』（リチャード・ドナー監督／1976）を選んだ。なにしろ“ホラー”物と言うか、オカルト映画だ。少々言葉が分からずとも「怖いですね、怖いですね」で通していれば何となく意味は掴めるだろう。グレゴリー・ベックもリー・レミックも全部の役者がペルシャ語を喋っていたが（リー・レミックという女優さんのペルシャ語が不思議にはまっていた）、それでペルシャ語なんのその、内容はよく掴めたし、結構面白く観られた。大成功だ。その時のことを思い出し、ニューヨークもその伝で行こう、と極めて単純な発想だったが、そう考えた。その時やっていたのは『CATS』と『BIG RIVER』だった。そういう考えだったから、「猫」だって「トム・ソーヤ」だって構わない。「どちらだってまあ分かるだろう」という具合だった。それで小屋の名前が気に入った後者の方を選んで観た。と言いながらその小屋の名前も、「ビッグ・リバー」の話も実は忘れてしまっている。歳は取りたくないものだ。――とは言え、この時はじめての経験だったと思うが、コンピューターで仕切られた舞台装置に、えらく感心し、操作しているスタッフが誰にでも見られるように客席の一番後部に控えていて、彼らの動きが見えるのも、舞台のそれよりも楽しかったのを覚えている。とにかく『オペラ座の怪人』は演っていなかった。演っていたら観ていたと思うが、“四季”のとは比べてどうだったのだろう。観ていないので私には、舞台なら、臆気ながらとは言え、“四季”の印象しか残っていない。

そう言えば、水島弘が病で臥せっていたから、というだけではなく、なんとなく、“四季”の舞台にご無沙汰してしまったが、浅利慶太の昭和の「戦争と平和」をテーマとした三部作 ①李香蘭 ②異国の丘 ③南十字星を纏めて上演するらしい。①は私の小学生のころの憧れの美女だった。②はシベリア・シリーズの画家香月泰男と一緒にシベリア抑留地にいた先輩に色々苦勞話を聞いていた。③は私の兄の玉碎地だ――。そんなわけでこの三部作から観たいと思っている。その節そんな“四季”の舞台を観ながら、小学校の頃を懐かしがり、所謂終戦直後のことを思い、今こそ兄の「名誉の戦死」の意味を問い、改めて水島弘の冥福をも祈りたい。

ちなみに“オペラ座”が本当に「中世の拷問室の上に建っている」ものかどうか、私はその事実を知らない。しか

し、ヨーロッパの古い都市なら、どこでも（パリでなら尚更）近世以後の新しい建物の下には、何世紀か前の遺跡や遺物が埋められているとは言えるだろう。日本でも、たとえば京都や奈良など、一寸地下を掘れば、平城京や平安京の何かしらが顔を出す。よって東京やニューヨークのように妄りに地階など作れないことになっている。

水島の死から数箇月後、05年11月06日には、“四季”の『ミス・サイゴン』のヒロイン、キム役で92年05月から一年半ものロングランのミュージカル女優としてデビュー

し、高い評価を得、その後『屋根の上のヴァイオリン弾き』などでも人気を呼び、その将来に大きな期待を抱かせていた本田美奈子さんが急性骨髄性白血病で、『レ・ミゼラブル』降板の上入院治療していたが、その効なく亡くなった。享年38歳という若さというのも無念だが、またまた優秀な役者さんの死がなんとも悲しい。

参考文献

『古典映画ロードショウ』紀田順一郎著 双葉社 1980



「仮面舞踏会」での髑髏の面を付けた『怪人』
DVD『オペラ座の怪人』カルチュア・パブリッシャーズ刊
パッケージ記載写真より写す（光藤）

（みつふじ としお 本学名誉教授）